

伊藤外科ニュース



マスコミが語る医療

ところで、最近頻回に薬の宣伝が新聞やテレビで見受けられます。私から見ると、複雑な思いです。患者さんはこの宣伝を見て自分の症状に当てはまることが多く不安にならないだろうか、過剰な医療に結びつかないだろうか、と考えます。マスコミに惑わされず患者さん個々の体質や持病に適した治療を行うことに今後も気を付けてゆきたいと思えます。

また、話が変わって私は54歳になり、記憶力も低下して、個々の患者さんの検査結果や病歴を忘れることが以前より多くなり、時々ヒヤッとすることがあります。そういった場合には遠慮なく困っている事、心配な事、自分でやらなければならないと思っている事を医者やスタッフにおっしゃってください。伊藤外科が地域のかかりつけ医として機能するためによろしくをお願いします。



予防注射のお知らせ

最後に、十月より接種が始まるインフルエンザワクチンは、例年の季節のインフルエンザと新型インフルエンザに対処するように生産されています。生産量も充分であるとのことですので安心してください。

医療法人社団 顕彬会 伊藤外科

〒160-0023

東京都新宿区西新宿5-8-10

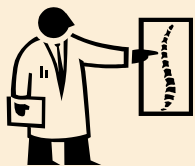
TEL03-3372-6456

新宿駅西口発 京王バス「十二社池の下」

下車 徒歩2分

都営地下鉄大江戸線「西新宿五丁目」より

新宿方向 徒歩3分



77号

2010. 10 発行

休刊についてのお詫び

今年の夏は、伊藤外科ニュースを休ませて頂き、申し訳ありませんでした。原稿を書いている今日は急激に気温が下がり、行政からはインフルエンザに関する書類が届く季節となりました。従来日本には四季があり、その移り変わりがゆっくりで季節を楽しめたものでした。今年の急激季節の変化に皆さんが対応できず健康を害さないか心配しています。



近年の医療の細分化

さて、最近の患者さんとの会話の中で現在の医療の問題点が浮き彫りになったことがありました。その患者さんは、糖尿病とひざの関節炎のため別々の大きな病院を受診しています。この方の話を要約すると、糖尿病の先生は、「毎日1時間歩きなさい」と指示し、整形外科の先生は、「痛みの強いときは安静にするように」とアドバイスされる。さて私はどうすればよいのでしょうかとのことでした。

二人の医師は各々専門家として適切な意見をしたわけですが、身体を分けることはできず、患者さんは困り果てたわけであります。

近年、医療は細分化され「病気を診ずして病人を診よ」（私の母校である慈恵医大の創設者高木兼寛先生の言葉です）の医療の基本の重要性が再認識される気がします。町の診療所である伊藤外科と病院の連携の際にはこの基本を大事に考えて患者さんを紹介しています。

三弓先生の本棚⑥

今回の一冊

声に出して活かした論語 70 (三戸岡道夫・編著)

ここ数年、「論語」がけっこうなブームになっている。論語といえば、「子曰く」くらいは知っている。しかし、昭和も後半になってから教育を受けたワタクシなどは、その先が続かない。

そもそも「論語」とはなんぞや？（論語を素読した世代には恐縮ですが、知らない方と、ワタクシ自身のために、再確認）。儒教の始祖である孔子と高弟の言行を、孔子の死後、弟子が記録した書物だそうで。孔子が中国で生まれたのは、紀元前550年。仏教の開祖・釈迦とトントン、キリストより随分と前である。そんな大昔の人の哲学や道徳がいまに通じるというのは、人間、何千年たっても根本はさして変わらないということなのでしょう。

戦前教育世代の三弓の本棚には、論語の本がいくつかある。その中から今回、手に取ったのは、三戸岡道夫氏の『声に出して活かした論語 70』。「声に出して読みたい」ではなく、「活かしたい」というタイトルに、「いまの時代こそ論語から学べ」という著者の想いが伝わる。

早速ページを開いてみて、初っ端でつまずいた。

子曰く、仁を好みて学を好まざれば愚

(孔子は言われた。仁徳が好きでも学習しなければ、愚か者である)

この文は、「知識が好きでも学習しなければゴロツキ。信義が好きでも学習しなければドロボー……」と続く。「仁（仁徳）・知（知識）・信（信義）・直（正直）・勇（勇気）・剛（剛強）」——孔子が説く6つの徳を実践するときの戒めが示された文である。

なんでつまずいたかというのと、「仁」、この言葉がすでにわからないのである。いや、頭で漠然とはわかっている。だが、あらためて「仁」の文字を示されたとき、「ところで、『仁』ってなんだっけ？」と、立ち止まってしまった。

「仁愛」「仁義」「仁徳」……、「仁」の付く言葉はいくつか知っていても、「仁」という言葉そのものが己の肝に響いて届かない。そのことに気づかされて、ハタとした。

で、あらためてひいてみました、広辞苑で。

「仁」 = 「いつくしみ」「思いやり」

「いつくしみ」、この言葉を噛みしめてみる。と、腹の底のほうにストンと落ちてくるものがあった。ウン、これならわかる——といった次第で、自分がわずかに培った言葉に助けられながら、なんとか「仁」を腹の入り口ぐらいまで消化することができた（たぶん）。

「仁」ひとつとっても、この苦勞である。しかし、こうしてひとつひとつの言葉を咀嚼し、自分の血肉にしなから、2500年近く伝え続けられる（ということは、なにがしかの普遍性を持った）孔子の語るところを、時間をかけながら何度も読み返してみる——これは人生後半のなかなかの楽しみになりそうである。（一弓）